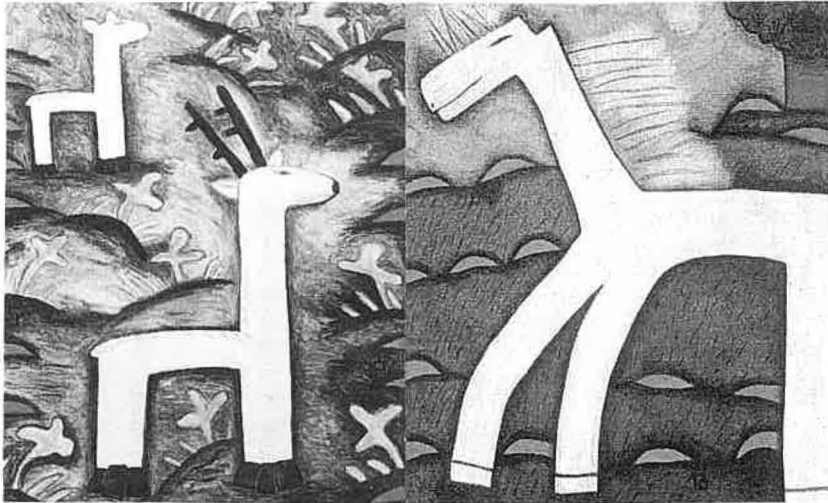


朝鮮文学など読まなくてもいいわけ

—ゾンビどもの世界での対話—

三枝壽勝



—先生、しかめつっらしい顔してどうしたんですか？

—いやね、さつき学生が来て卒論書きたいって話をしたんだ。

—それがどうかしたの。

—学生が言うには、韓国の文学に残っている日本の植民地時代の影響を調べてみたいってんだ。日本の支配が彼らの文学にどんな傷跡を残したか自分たちの反省をこめて扱ってみたいってんだね。

—なかなか感心じゃないですか。いまだき珍しいんじゃないやしません。

—何が感心なものか。またかっつうんざりしてるんだ。

—なぜですの。過去の日本がアジアの人々に何をしたかを反省するのはいいことじゃないんですか。

—そうかね。おれは朝鮮文学を外国文学として研究しようと思っ
てはいるけど、日本人救済のためだとは思ったことないね。

—どういうことですか？

—いやさ、過去の日本人が何をしたか反省するってのは、日本人が悪いことをしたと思ってるから言うんだろ。そしてそれを韓国の文学を通して知るってのは、自分たちの犠牲者にどんな傷跡を残したかを知るってことだし、それを通して自分たちが現在どんなにそのことを反省してるかを知らせることになるのじゃないか。つまりその作業を通じて救われるのは自分たち日本人のほうだということさ。殺人犯が自分の殺した死体や傷つけた被害者の様子を見に行きたくなると同じ心理じゃないかってことさ。

—それ違うんじゃないやしません？その学生がいったのは、自分たちがその犠牲者たちにどんなことをしたかを知ること、彼らのこ

とをよりよく理解しようとして言ったんじゃないんですか？

—彼らのことを理解する？だったら外にもいくらだってやり方はあるだろ。だいたい、彼らという犠牲者をそうやって理解したらその犠牲が償われるとでもいうのかね？彼らの失われた時と損害が取り戻せるとでもいうのかね。いつだってそうなんだ。アジアがどうのこうのという、過去の日本のことが出てきて、それでこれから将来自分達がどう行動するかを言うのかと思うと違うんだ。いつでも口先だけなんだ。反省を高らかに唱える日本人だけがいい子になってその人だけが救われるんだ。本当に犠牲者のことを思ってるんだしたら、もちっとまじめに考えてもらいたいって気がするんだ。自分のほうが犠牲になろうって気はこれっぽっちもありません。いつたい自分の人生犠牲にしてもやる気があるんかね。

—それ、ちよつと言いきりありません。

—とにかくだ、いつでも自分たち日本人の痕跡にしか関心が無いということさ。どこまでも自分たちの事にしか関心がなく、相手の方にちよつとも近づこうとしないってことさ。日本人のやったこと、日本人の残したこと、そんなことにしか関心ない。そして、自分だけは大勢の日本人から抜け出た特別で感心な日本人に成ります。ほんとに反省してるんだしたら静かにしてりゃいいのさ。戦時下のアメリカの政策やソ連の收容所のこと、抗議するんだしたら、大陸や植民地で日本人のやったことがそれとは比較にならないぐらいどんなに酷いものだったか考えたらいいんだ。

—それで？

—要するにだ、過去の日本の行動を反省するとかいつてるけど、

その実、自分たちが持ち出した犠牲者のことだって、ただ自分たち自身のことを論じる手段でしかないってことさ。自分たちの犠牲者を利用して反省してる自分たちを主張する手段にしてるんだ。植民地支配の傷痕？その痕跡が朝鮮の文学にいかに残ってるかだと？冗談じゃない。要するに、お懐かしなのが植民地時代よ！、じゃないか。相手の文学や文化を徹底して知ろうとするより先に相手の中にある自分自身の刻印だけを探そうとするんだ。相手の歴史と文化の中にある自分自身にしか関心を示さぬつてのは傲慢さと偏狭さの表われじゃないか。

—かなり極端ですね。

—そうかね。だって、ほんとに反省してるんだしたら、原爆が落ちたのは当然の報いじゃないか、って言ってるアジアからの発言になんで不愉快になるんかね。私たちは世界の平和のために尽くすことにしました、か。自分勝手にアジアを荒らしまわって、こんどはその本人が反省してるから、この自分たちの反省を認めよ、ってまた押しつけるんかね。そういや、むかし、朝鮮の三一独立運動のとき、日本人が教会を焼き討ちして虐殺したことがあったけど、そいつを反省した教会の関係者が韓国に渡って記念碑を建てたことがあったつけ。いい気なもんだ。要するにいつでも自分にしか関心がないんだ。そして自分だけは、ほかの情けない日本人から抜け出したと思ってるんだ。

—でもそれもうだいたいお前のことですよ。わたしたちそんなにこだわりを持ってませんわ。

—だからどうなんかね。もう過去の日本のことなんか言う必要はないってこと？そーいや。こういう日本人が関心をもつもう一つ

の話題があつたつけ。独立運動や社会運動にかかわつた朝鮮人のことに対する関心。だから過去の詩人でも尹東柱や李陸史、現代なら金芝河のような人にしか焦点が当たらないんだね。彼らならファンはけっこういるみたいなんだ。とはいっても最近の韓国でも尹東柱はもつとも好きな詩人で特に「序詩」が一番人気あるってから無理もないけど。でも同じ受けとめかたしてらんかな。それと、年配の人の傾向としてはプロレタリア文学の担い手だつた作家に対する関心だ。そうした人たちを弾圧して彼らの節を曲げさせたのがわれわれ日本人であり、そのことに関心を示す自分達是一般の日本人より水準が高いとでも思つたんかね。それに最近じゃ在日朝鮮人問題ね。時代の波に便乗はしてるが何十年前とおんなじ水準でむしかえしてるうさんくさい幽霊みたいな思想屋さんって感じだね。人が黙つてるのは理由があつてのことだということに気づかず誰も言わない隙をいしてしゃしゃり出るんだね。

—先生はいつたい日本人が嫌いなんですか。

—先生つてことは嫌だな。先生、先生つて呼ばれるほど馬鹿じゃなし、つて言つたつけ。おれは好きでも嫌いでもないね。

—じゃ朝鮮は、少なくとも朝鮮文学は好きでやつてるんでしょ？

—やつぱり、好きでも嫌いでもないね。おれは朝鮮の文学が日本人にとつてぜひ知らなきゃならぬ大切なものだと言つたこともなければ、人に勧めたこともないね。そりゃ日本文学だつて同じで、文学が特別で、そこに関わるのが特別な価値があるって宣伝する気になつたこともないよ。気持ち悪いじゃないか。

—じゃ、何のためにやつてるんです？何だかとってもひにくれてるみたい。

—最近どうも面白くないんだね。この研究者とか学者とかの世界もね。昔、誰かが言つたつけ。人間は完全な休息のうちで情念も仕事も気晴らしも集中することもなしに在ることに堪えられないって。だからつてたえず騒がしくしなきゃなんないんかね。だけどそれじゃ元来の発言のパロディにもならないんだよ。経験した人はすぐ分かるけど、確かにおれたちの精神は考えることも含めて何ももしないことに堪えられるほど頑丈じゃない。だけど考へるってことだつてとっても恐ろしいことなんだ。同じ人が言つてるように、無限と虚無の深淵を前にして何とも言えないほどの恐怖に堪えられる人間なんていそうにないからね。あの永劫回帰だつて、正しいの正しくないのつて賑やかに語るのは勝手だけど、少なくともあの発想そのものだけは人を恐怖に慄かせる要素をはらんでるじゃないのかね。昔、熱力学でエルゴード定理がどうのこうのと聞かされたけど、どうも無限がからんだある種の分野は人を生きることすら死ぬことも選べない恐怖に陥らせるんじゃないかな。カントールやエレンフェストはその犠牲者だつただけでニーチェは幸いと数学に素人だつたせいかな狂人になるだけですんだんだ。

—せんせ、何だかちつともわかんない。で、何がイヤだつての。

—うん、つまらないことにもこだわるようになって、つてことか。いつぞやもある人が論文見てくれつてんで手伝つてやつただけけど、それつて、ある先生の還暦の記念論文集に載せるやつなんだ。おれは弟子でもないし色々あつて書かなかつたけど、その人、いざ投稿する時になつて言つたんだ。自分が投稿するその論文集の還暦の先生は何の専門の方ですか。その分野の専

門家が日本に何十人もいるならともかくだよ、たった一人か二人もいない分野なんだけ。だのに専攻が何かも知らないんだ。しかもそのくせ自分の名前はちゃっかりそこに載せようってんだ。後でそのこと知ったその当人の先生は怒りもせず、若い時にはそんなこともあるだろうねって言ってたけど愉快な話じゃないね。またこんなこともあったつけ。同僚とうまくいってなかつたところで昇任の審査があつて、自分は昇任できたが相手が保留になつたと聞いて、私が勝つたつて言つたんだ。うんざりだよ。つくづくいやになつちやうじゃないか。

—じゃ、つき合わなきやいいじゃありませんの。

—うん、そういうこと。だけどそういう人のほうが世間的には社交家で人格円満だからな。うっかり注意なんかするとおれだけが評判悪くなつて皮肉れ者で悪者にされるつてこと。円満な社交家たつて悪いやつてゐるよな。倫理学の先生がレイプやんないとか刑事が強盗殺人やんないつて保証はどこにもないもんな。ただ人格とか職業がカモフラージュして疑われにくくしてるだけじゃないんかな。凶悪犯罪で歓喜に震えてる新聞の見出しを見てると、あいつらの正義の怒りつてのは自分のやりたいこと出し抜かれた悔しさじゃないかつて気がしてしようがないな。

—しようがないじゃありません、当然なんだから。大学のせんせだつて世間じゃ信用されてる部類ですよ。それにせんせ、話がいぶそれたみたいよ。朝鮮文学の話はどこにいつちやつたの。

—あれつ、何話せばよかつたんだつけ。

—卒論がどうの、反省がどうのつて言つてたくせに。

—あ、何のために朝鮮文学なんかやつてるかつてることかな。

—それでもいいですけど。

—去年おとしと総合文化研究所の主催で外国文学と翻訳の連続講演やつたけど、あれよかつたよ。

—またあ、ごまかして。

—そうじゃないよ。あれ聞いてて、ああ、みんなおんなじような問題かかえてるなつてことも分かつたし、外国文学への関わり方にも色々あるつてことが分かつて為になつたよ。

—内輪の話はやめにして。

—外国文学に関わるとその国または地域または民族またはその言葉を使つてゐる人たちのことが分かつてくるかどうかつてことね。たしかに文学にそういつた人々の文化や歴史が反映してるのは確かだろうけどね。だけど一概には言えないみたいだよ。だいたい関わりかたがそれぞれ違うじゃないか。

—たとえは？

—自分の分野でいうと日本で翻訳がちよつと話題になつたとするね。ところがその話題のされ方がどうも本国とは違うんだ。本国でさほどののに日本で話題になつたりするし、本国で圧倒的な人気のあるものは日本ではほとんど受け入れられないというのが一般じゃないかな。また日本で評判になるのは本国の読者というより本国の評論家が話題にしたものが多いし、その評論家と結びついた日本の文学ブローカー達によつて紹介されることが多いみたいだし。また翻訳を読むとびつくりするほど日本文学とよく似た雰囲気なのに原文はやっぱり韓国のものだというのがあるね。こいつは翻訳した人が意識的に文体を日本文学に変えたんだね。こゝうなると原作を伝えているのかどうか怪しいんじゃないかな。原

文さえなければすばらしい翻訳ってことになるかもしれないけど
ね。でも新聞の書評って原文なんか問題にもしてないんだろ
うな。

—でも、自然ですばらしい日本語になっていけばそれはそれで立
派な翻訳じゃないんですか？

—ふん。その話はまたあとですることにしようか。

—じゃあ翻訳の前に外国文学そのものってことですね。

—うん、翻訳とも関係あるけど、翻訳の仕方にも色々あるように
外国文学への関わり方にも色々あるんだろね。研究とは関係な
いところから始めると、まず第一に、好きならいいじゃん、それ
以上何があるの、っていうマニア型ってのがあるか。これは原
作がどうの、作品の背景がどうか理屈をあんまり言いたがら
ない愛好家のタイプかな。自分が好きなら好いという点ではひと
りよがり型とも言えるけど、その態度を他人にまで要求するよう
になるとおしかけ女房型でもあるし、うっかり文学のすばらしさ
なんかお説教やりだすと小さな親切大きなお世話の補導委員型で
もありうるな。でもこういうのは文学愛好家だから本来の研究と
は関係ないかもしれないな。

—でもそれは大事なことじゃないんですか？

—そうか、そいつが大切だと言いたがるところに補導委員の役目
があるからね。研究と関係ないと言っちゃ言い過ぎか。

—その次は？

—うん。第二番目がこの百年日本で主流だったやつだ。というよ
り日本で表面的に一番目立ったものじゃないかな。外国の文学を
日本で紹介したり、それを利用して仕事をするタイプ。すなわち

輸入業者型だ。これにも紹介して儲かりやいいじゃないのという
興行師すなわち呼び屋型と、自分が輸入したものを材料にして自
分の仕事を作り出す加工業者型ってのに分かれるかな。ひたすら
ある作家の紹介や翻訳に打ち込むのが前者で、ある作家をネタに
して解説書いたり自分の言いたいことを言っちゃまうってのが後者
かな。とにかくいづれも自分の住んでる地域の読者の間で売れる
かどうかは商売の主たる関心という点では共通してるんじゃない
かな。比較のおだやかな部類にこの地域の人々の習慣はこうです
よとかそれにはこんな意味がありますよってな知識を売り歩いて
いる行商人型や骨董屋型があるかもね。

—ちよつと酷い言い方にも思えますけど…。

—別にけなして言ってるんじゃないよ。自分も含めてどんな様子
かって分類しただけだからね。その次の三番目が相手の国や地域
や民族や言語に取り込まれてしまったやつ。さつきとの対照でい
えば相手側が主たる関心の対象となってるものね。うっかりその
地域の文学と関わってしまったおかげでそこから抜け出せなく
なってしまうたという点では、情にほだされ若気の過ち一生ずる
ずる同棲型とでもいうか。

—それって一番目とどう違うんですか？

—一番目のマニア型ってのは例えばある作家のファンになって会
いにいったりするんじゃないかな。私は誰かのサインを貰いまし
たってなこと言ったりしてね。要するに自分が好きだという気分
が中心なんだ。そして翻訳するときには相手の意向にお構いなし
に自分なりの雰囲気で訳したり言葉を変えてしまうのに疑問を感
じないかもしれないね。ところが三番目の方は好きとか嫌いとか

を通り越してゐるんじゃないの。日本じゃとうてい歓迎もされない作品だつて本国で人気があればいっしょになつて読み、彼らが感動したと聞けば行つてともに感動を感じ取ろうとし、悲しんでいると聞けば行つてもにその悲しみも感じ取ろうとし、つねにもとの読者たちが何を感じているかひたすら感じ取ろうということになるんじゃないかしら。

—ふううん。だからせんせは韓国のものが好きでも嫌いでもないつて言つたんかしら。でも向こうのものは何読んでも面白いつておつしやつたことあつたでしょ。

—うん。向こうで出てるものとはかく向こうの人たちに読まれてゐるわけだから、いっしょになつて読む習慣がついちまえば理屈なしにひとりでに順応できちやうつてわけかな。とにかく水準がどうかとか、最先端がどうかなんてちつとも気にならなくなつてくるのね。そして日本人としてはそれらの読み物が日本で翻訳したつて売れないこともすぐ分かるんだ。

—それは韓国人と日本人とで感受性が違つてことなのかしら。でも日本で売れてる村上春樹は韓国でもベストセラーでしょ？

—うん。文学というより読み物に対する感じ方が違うということ。は確かにありそうなんだ。ただベストセラーつてのは別だろう。要するに流行だろう。流行してることが感じ方に非常に大きく影響するのは確かじゃないか。流行しているものを手に入れることによつて同時代の人々との心の繋がりを感ずることでもでき、その結果その本を読んで感動することもできるから流行は馬鹿になんないよ。ただしだよ、韓国で流行つてゐるからつて日本人がそういう感じを持つという気は起こんないけど、日本で流行つ

てゐると韓国人が読みたくなるつてことがあるのさ。それはこれまで百年間日本で西欧の思想や文学にどう対応してきたかを見ればなんとなく分かるじゃないか。そしておれのように朝鮮の小説なんかばかり読んでもあつちの人が面白がることも少しづつ感じられてくるけど、それが日本で読まれたいだらうことも感じられてくるつてことなんだ。輸入屋の文学ブローカーにはわかんないかもしれないけどね。

—でも、そうやつてあつちのものを読んで面白いだつたらそれでいいじゃないの。

—それだつたら第一番目のマニア型なんだ。そうなれぬところが三番目の同棲型の深刻さなのさ。

—いつたい何が深刻つてこと？

—要するに若気の過ちを繰り返す同棲つてのは今さら好きだの嫌いだの言う段階はとつて過ぎてしまつたけど、おかげで自分達とは違つた文化の背景を持つた人達をどうやつたら理解できるかつて問題におつかちまつたんだね。つまり文学を通して異なる文化をどう理解するかという問題さ。

—そんなこととつて誰かが言つてることじゃないんですか？
—だつたらいいけどね。なら翻訳のことだつて簡単に結論が出さうなものだけだね。相変わらず古めかしい言い方が今でもあるからね。

—やつと翻訳に戻つたんですね。その古めかしいつて何のことです？

—ほら、翻訳というのはまず日本語として自然に読めるものでなければならぬつてこと。日本語としてなつてない翻訳は翻訳と

して認められないってこと。

—そんなこと当たり前でしょ。

—うん。でもその日本語としてなっている翻訳ってのは日本語として立派な標準的なもの、または美しい日本語っていう意味も入ってるみたいなんだね。

—そりゃそうでしょ。日本語としておかしな文章が翻訳として通じるわけはないと思うけど。

—そうかね。じゃ、日本語で書かれた小説はみな全て標準的な日本語で同じ文体なのかね。漱石も鴎外も村上春樹も吉本ばななも皆同じ文体なんだろうかね。日本語の小説で破格の文体というのはなかったのかい。日本語を破壊するような試みはなかったとも言えるのかね。デビュー当時日本語を破壊するとか日本語としてなっていないって非難された作家がいたように記憶してるけどね。

—そりゃ必ずしもそうとは。

—じゃあ、翻訳する前の原文だって同じだろ。全ての小説が同じ文体で書かれているわけないし、その中には上品なものもあれば卑俗なものもあるだろうし標準的な語法からはずれたものもあるうじゃないか。それらがみんな同じ日本語に置き換えられるってこたちよっと考えられないだろう。

—そう言われればそうだけだ。

—だとすりゃ、翻訳の文体もそれに応じたものでなければならぬってことになるじゃないか。

—じゃあ、どういう方針で翻訳すればよいつてことになりますの？

—だから、今翻訳しようとしている原文の文体がその原文を生み

出した言語的背景の内でのどんな位置を占めるかが分からなきゃならないってこと。それは共時的に言えば総体的な言語体系のなかで占めるその作品の位置を考慮することであり、通時的にいえばその言語の歴史のなかでの位置を考慮することだろう。総体的な言語体系って言ったのは個々の言語使用者の頭の中にある言語体系はそれぞれ異なっていてびったり重なることはありえないのだからそれらの和集合を考えたままでのことで、当面翻訳の対象となってる作品がその和集合のなかで占める位置を考えようということ。どうせこうした和集合においては共通部分の積集合を考えたって、何らかの意味での平均を考えたってあんまり意味はなさそうだしね。また各言語使用者が実際に使う言語体系と頭の中に持っている標準的な規範としての言語体系も抽象としてはありえてもどうてい一致しそうにないしな。通時的な位置といったのはそりゃみな同じ時代の作品なのに古臭いのもあればモダンなものもあって一概にいえないからさ。要するにそれぞれの作品がもとの言語環境で占めている位置を考慮して、できるだけそれに応じた日本語の体系に置きかえる努力をしようということ。

—それあたりまえの話に聞こえますけど。

—そうかね。ものわかりがよくてすぐ納得するってのは自慢にならないのだけ。とにかく実際にはそう簡単にはいかんさ。たとえば方言はどうなんだ。原文にある方言は日本語のある方言に置き換わりやすむんかな。そう簡単にはいかんということにはわかるよな。でもここまでなら目新しくもないか。

—じゃ、まだ先がありますの？

—うん。さっきの日本語として自然に読めなきゃならないっての

にひっかかってね。おそらくこの発想はこの百年ぐらいの日本における西欧文化移植の遺物じゃないかとも感じてるんだ。西欧文学の翻訳はみな読みやすく美しい日本語の作品に置き換えねばならぬなんてったら変だと思わないか？原文だつて色々あろうに。だのにそんな発想が生じたのは、さっきの第一番目のマニア的人間ならしかたないけど、そうでなけりゃ西欧のものごとがすべて日本のものより優れているという奴隷根性の発想としか思えないね。もともと上品なものは上品に、品の悪いものはやはり品のない日本語で訳さなきゃならんのだろ。

—そこまではさっきも同意したじゃありませんの。

—そうか。そこでだ。うん。自分の経験で言おうか。たとえばおれが日本語と朝鮮語の両方で同じ内容の文章を書くとする。ところでそのどちらか例えば朝鮮語を先に書いておいてからそれを日本語に翻訳した場合と、初めから別々に文章を書いた時では結果が違ってくるんだ。初めつから別々に書いたときは話は簡単だ。とにかくそれぞれの言語環境に合わせて発想もそれに応じて書きゃいいんだから。ところが先に朝鮮語で書いてからそれを日本語に直すと元の原文の朝鮮語にある独特の言いまわしにひきずられかなり妙な日本語になる可能性があるんだ。よくいう直訳つてのはこれに近いかな。ところで小説の翻訳つてのはこのどちらがいいかね。元々の原文の言いまわしに引きずられてやや不自然な日本語でもよいのか、本来作者が日本人だったら書いただろう自然な日本語にすべきなのかってことさ。

—さっきの話だったら、後のほうの自然な日本語のほうになるん
—だよ。

—どうもそう簡単に言いきれないってことなんだ。

—どうしてそんなことになるのかしら。

—そりゃ、なんでおれたちが外国文学なんかに関わってるかってことなんだ。好きだ嫌いだを越えて外国の文学に関わっていると、どうしてもその文学の背後にある発想法にまで行き着いちゃうじゃないか。おれたちが無理を承知で日本語の本なんかほとんど読まずに毎日原文ばかり読んで過ごしてるつてのはその異質な発想法の世界にどっぷりつかつて暮らそうとしてるからじゃないかな。とするとかなり単純な置き換えがきく慣用句までもそのまま訳したくなってしまう訳さ。

—でもそれも程度問題じゃないかしら。

—うん。実際にはそうだろうね。だけどここに決定的なことが含まれてるような気がするんだね。つまり外国の文学を通して異質な文化やそこにおける発想法や感情全てを知ろうとし、理解しようとする態度を持ち続けるかぎり、もし翻訳するんだつたらそうした原文にある異質な発想法や言いまわしをできるだけ伝えたくなってくるんだ。つまり異質な文化の存在を日本人が翻訳を通して知る可能性がそこに生まれるつてわけ。だつていつでも自然な日本語でしか外国の文学を読まないんだつたら、そもそも異質な文化圏の異質な発想法の存在に気がつきもしないだろうし、世界中どこでも自分達と同じに考えてるんだという誤解さえ抱きかねないじゃないか。つまり人間はみな同じで世界中が自分と同じ発想をするはずだという傲慢な日本人の再生産さ。

—何だか変な気もするけど、まいいか。

—つまりだ。異質な文化圏が存在するんだぞつていうことを強調

— するために原文にある異質な発想法や語法をできるだけ日本語に移し、翻訳を読んだときに違和感を感じさせ読者に注意を喚起させる必要があるんじゃないかってこと。よく言う翻訳調と言われる文体も西欧の文の翻訳から来たんじゃないかってこと。こいつをもっと大規模にしてそれぞれの文化圏ごとに異質で違った文体を多様にどんどん取り入れようってこと。つまりもつともつと乱れた日本語の翻訳がもつとあつてもいいんじゃないかってことさ。もちろんこれはどこまでも異質な文化圏の存在を意識させるのが目的で日本語の可能性を広めるなんて殊勝な考えで言ってるんじゃないけどね。

— まあ、話としては面白いけど。そんなにきばって言わなきゃいけない問題なのかしら。

— そうかちよつと力みすぎたかな。

— そうよ、なんかおかげさみたいよ。それに自分の変な翻訳の言い訳にも聞こえるわ。

— ま、とにかく日本で外国文学の研究にたずさわるってのは何だろって考えさせられるんだ。翻訳だつてその外国文学への関心の持ち方のめりこみ方によって変わるってことだよ。作品を生み出してる言語やその背景にある文化の特色をできるだけ再現するってのはどういうことかってことに対する姿勢の違いかな。日本語としての自然さとか不自然さとかいう見かけ上の結果もその姿勢の違いの反映じゃないのかな。古典に関わってる人はあんまりこんなこと感じないのかもしれない。生きている作品の担い手が目の前にいないから相手側のこと気にしないですみそうだもんな。だから比較的マニア型でやってゆけるかもね。

— そんな問題も将来外国文学の紹介がもつともつと増えてくると自然に解決して行くんじゃないやありません？

— 冗談じゃないよ。西欧のものはもちろん朝鮮語だつて翻訳の歴史はすでに百年はとくに過ぎてるからね。百年たつても変わらないものは将来も変わんないと考えたほうがいいんじゃないかね。どこの国だつて外国の言葉や文化に対して関心を持つのは戦争するとか植民地を経営するとかしたときじゃないのかね。その点じゃ日本で朝鮮語が外国語教育の対象として成立しているのはかなり特殊な事例かもしれないけど、中国語や朝鮮語は近い地域でしかも交流のあるところの言葉だから。ラジオやテレビでもやってるし大学でも教えてるってな、かなりのことだと思っよ。だのにその朝鮮に対する関心というのは一向に深まってないという感じがしてならないんだね。

— わたしの感じてるのと反対みたいだね。映画や音楽の分野ではほとんど同時代的な繋がりができているような気がしますけど。

— そりゃ、最先端の分野はみなそうさ。音楽なんぞではもう香港も台湾も韓国もほとんど垣根なしに往来してるよ。だのに根本的な文化の深いところでは一向に理解が進んでないという気がしてならないんだよ。最先端のことしか関心しめさない新しがりややつにこんな泥臭い話わかりやしないもんな。

— なんだかさつきから繰り返しばかりみたい。だつたらさつききの音楽や映画と同じに将来交流がもつと進めば自然とそんな問題も解決されてくると考えられないんですか。

— その可能性は排除できないな。でもそうやって互いの交流が盛んになって自然に問題が解決するんだつたら、おれたちが研究だ

の学問だのいつてゐることは一切必要ないつていう結論になるな。ほつといつても状況次第で自然に問題が解決するんだつたら困難で根拠を要する思想的な営みなんぞ無力で何の役にも立たなかつたことが証明されちまうじゃないか。

—そうよ、あんまり訳のわからないことばかり言わないほうがいいかもよ。もつともつと韓国の文化や文学を積極的に紹介する仕事をしたいけば自然に解決するんじゃないやありませんの。

—おつと、おれは少なくともマニア型じゃないからな。自分の方から韓国の作品でいいものを日本人に紹介しようなんてことに一生懸命にやなれんよ。おれがやつてゐる翻訳なんてどうせみんな他のやつがやりたくないとかできねえつて放り出した残り物ばかりじゃないか。これからも変わんないよ。

—なんか理解しにくいみたい。なぜ韓国のもをもつともつと紹介する必要があるつて思わぬのかしら。

—だつて、おれがさつきからいつてゐるのは異質な文化圏の異質な発想法や感情に入り込むことだつていつただろ。そしてそれは日本人がそうした異質な文化に対する理解を深めることにつながつていけばいいつてことさ。

—だからますますわかんないの。どんどんたくさんのおを紹介すればいいじゃないの。

—そうか。知識のこといつてんのか。おれはだから行商も出来ねえ部類なんだな。交流が盛んになつたり知識が増えるつてのは互いの理解を深めるつてことを必ずしも保証しないんだぜ。かえつて知れば知るほど嫌いになるつてやつがあるじゃないか。ほらスカートは何とかつて本あつただら。おりゃ読んじやねえけど、あ

の本読んだやつつて韓国人つてこんなにだめなんだつて嬉嬉として話してくれるじゃん。あの本は韓国人の悪口言いたがつていた人に向つてつての材料を提供する本かなつて気がしちやつたの。その手の本で多いんじゃない。いつたん偏見さえ出来ていりゃあとは知識が増えりや増えるほど悪口と偏見を助長することだつてありうるんだぜ。知識が増えりや理解がまして心が通うんだつたら凶悪犯罪人の担当検事はみんな無罪宣告することになるじゃんか。人間なんでもともと似たようなもんだろ。やつたことがいくら極悪非道だからつてどつか人間として通じるところがあるかもしれないしな。

—だから何をしようとするのか理解できないのよ。

—うん。だからだ。おれがやるこた当分変わらんさ。だつておれは国家公務員の研究者だからな。昔でいや公奴婢つてやつだ。お上に仕えて事務もこなし会議にも出るし授業もこなしそのほかに論文書くから研究者だつて。それで給料もらつてゐるのさ。論文だけ書いてて月給もらえらんだったらおれたちの原稿料は流行作家よりはるかに高いよな。そういうすばらしい人もいるかもね。それにうちの学生の払う金は卒業まで二百十五万八千八百円だ。百二十六単位ぎりぎり卒業する学生だつたら一単位あたり一万七千円とちよつと。授業は四単位だからその四倍か。別のやり方で計算すりや授業が一年に三十週とすりや学生の負担は一週あたり一万八千円ぐらい。てなことで自分の担当してゐる学生かその親の出してる金も預かつてるしな。彼らが自分の出した金捨てるのは勝手だけど、こつちから彼らの金を捨てさせるわけにはいかんよな。ようするに仕事はこなさにやならんてこと。そんなでおれは

あいかわらず韓国・朝鮮の文学につきあつていくわけさ。好きとか嫌いなんてこた通りこしてるね。

—だからそれがさつきまでの話とどうつながるのってことよ。

—だからか。ずるずる同棲型は自分の担当する地域の文学にのろわれたようにしがみついてやつてかなきゃなんないってこと。そして他人には韓国の文学を押し売りはしないけど要請があればご要望にお答えしましょうってこと。そうか。だからなんで知識を増やすことに積極的でないかってこと？うん。だって日本で必要とされてる大事なことって山ほどたくさんあるじゃん。そんなこと一つ一つ勉強してたら一生かかったって吸収できないよな。差別の問題、障害者の問題、政治の問題、なんてつたらきりないじゃないか。だからそれぞれが自分の仕事を追及することで他の人がわざわざ知識を得なくても問題が解決するようにせにゃならんということだろ。そうか。だからといっておれは行商人じゃないからね。要するに知識なんてなくたって問題に対処できる思考をあみだすことが求められてるんじゃないかな。異質な文化との接触のことだって、相手のことを知らなくたって摩擦が起こらず互いに心が通じるようにするにはどうすりゃいいか、これを探り出すことの方が大切じゃないかね。それをそれぞれの文化圏に関わっている担当者が探求することじゃない？

—なんか抽象的だけどわかるような気もするわ。

—だから文学作品という具体的なものを翻訳するだの読んで理解するだのってのは末端の事柄ってこと。おれは朝鮮や韓国の作品をみんなに読んでくれとか理解してくれって言うつもりなんかないってのはそういうことだったの。おれは彼らの代弁者でもない

し保護者でもないしね。そんなの押し売りするつもりもないし、他人が自分のやつてる分野に関心ないからって嘆く必要ないもん。要はそんなおおげさな知識や思想をもちださなくても、人間としての思いやりがあれば解決することがまだまだいっぱいあるんじゃないかってことさ。外国文学やつてるもんはその分野でそのこと考えたらいんじゃないかなって思ったわけ。

—ふううん。文学の話がぜんぜん違つたところにいったみたい。ところで、せんせ、どうして表題にゾンビどもの世界なんてつけたんですか？

—えっ、おれ一回も説明しなかつたつけ。そりやまたいつか話するよ。

(終わり)